

あゆみ通信

VOL. 175

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

親鸞のことば

どんなに深い苦悩も救われる

とんない・しんぞう
貪愛・瞋憎の雲霧、常に

眞実信心の天に覆えり
(正信偈)

「貪愛」とは、何かを貪り求めること。「瞋憎」とは、思い通りにならないものに怒りや憎しみを感じることです。このような人間の苦悩は雲や霧のように太陽(阿弥陀さまの救いのはたらき)を覆ってしまうと、その苦悩の深さが語られています。分厚い雲や深い霧が発生した時、太陽の光を遮って朝・昼であっても辺りが暗く感じることがあります。しかし、太陽そのものがなくなってしまったわけではありません。どれほど人間の苦悩が深くても、そのはたらきに気が付かなくても太陽は常に私たちを照らしているのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

なんでお寺へ？

ある時、ご住職に「なんで、お寺に来てくださるんですか」と尋ねられて、ドキッとしました。「なんでや?」「何故だろう」すぐには、答えられませんでした。こんな質問が、来るとは思いませんでしたが、考えてみればそうです。すんなりと、「阿弥陀さんに、背中を押されて」なんて答えが返せるまでには、残念ながら、そんな領域にも達していません。

それこそ、チコちゃんに「ボウっと生きてんじゃねえ!」と、叱られそうです。

帰ってから、あらためて考えましたが、聞法未熟の自分には「亡き父母のご縁からでしょうか」くらいしか、思えませんでした。ご住職が言われるように、家でゆっくりしていたり、映画や買い物、それこそ旅行などあるのに、なぜ、来てくださるのかが分かったら、他のご門徒さんにもお勧めできるのにと。皆さんは、どう思われますか。(本)

おかげさま

前大谷中・高校校長 真城義麿



「恩」と言う言葉があります。インドの「カタニュー」と言う言葉を中国語に翻訳するのに、この「恩」と言う字を使いま

した。「カタ」とは「(私のために)為された」と言う意味です。「ニュー」は「知る」と言う意味です。すなわち「私のために為されたさまざまを知る」と言うことです。ですから私の心に留められている、してもらったこと、また私を支え、成り立たせてくれている一切の要因を「恩」と言う言葉が示しているのでしょうか。その恩に心を寄せ「ありがとうございました」と感謝の思いを込めて、私たちの先輩方は「おかげさま」と言う言葉を使ってきました。その恩を知り喜び感謝する営みと、少しでもそれに報いたいと、出来ることを惜しまずさせていただこうと言う営みを「報恩」と言います。「南無阿弥陀仏」と言うお念仏は「報恩行」と言います。私たちは、親鸞聖人のご命日を縁として「報恩講」をお勤めします。これは、単に恩があるからお返しをすと言うことではなく、私が生きるということを支え、成り立たせている根源的なことに思いをいたし、報恩行につとめようと言う思いを確かめる仏事なのです。この私は、いつでも、どんな状況にあっても、仏さまから願われた存在であり、目覚めを促すはたらきをいただいているのだと、人生をかけて明らかにしてください。ださった親鸞聖人の教えを確かめ直すのが「報恩講」の大

切な意義ですね。(「仏教の仏一仏教はじめの一步」東本願寺出版より)

第2組合同報恩講

日時 11月8日(水) 17:00
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 お勤めと法話。

懇親会(お齋あり)と同朋総会
講題「報恩とは?一恩に報いる、恩を報せる」

講師 戸次公正先生

(第22組 南溟寺)

会費 2000円(お齋代)
申込 お手次寺院まで

あゆみの会総会

日時 12月17日(日) 13:30
会場 即應寺(阿倍野区阪南町)
内容 総会(事業報告、会計報告、事業計画案、予算案、役員選出)。法話と座談

講師 藤井善隆先生
(即應寺前任職)

いつの間にか気が付けば15年目の総会です。

同窓会のつもりで、顔を合わせませんか。別途、案内します。



第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」開催



9月27日(水) 午後2時から、浪速区憶想寺(神保朝成住職)を会場に、今年度最後の第2組聞法会「共に学ぶ正信偈」が講師に新田修巳先生(第4組正業寺)をお迎えして開催されました。例年になく厳しい残暑の中を、組内の住職、坊守や門徒、推進員等33名が参加しました。



先生は何枚もの資料を用意してくださり、人生において最大の課題である生老病死について親鸞聖人はどのように教えてくださっているかについてお話しくださいました。先生は25歳ごろから人間は死んで逝かなければならないと言う問題が、自分自身にとって一番の課題になったと話されました。

そんな頃、先生は友達に会いに行かれる途中に立ち寄った書店で高見順の『詩集死の淵より』を買われ、その中に「帰る旅」と言う詩が友達と話題になり、詩の中で、死を「わが家に帰る」とも「大地に帰る」とも言われていることについて、先生が「どのようにして帰っていくのだろうか」と問いかけられたら、友だちは「本願力によって帰るのではないかと」答え、先生は本願力によってお浄土に運ばれるとはどういうことだろうかと疑問を持たれたと。



休憩の後、阿弥陀の本願が私たちにどのように手渡されたのかということについて、先生は『教行信証』信巻、本願成就の文より、「諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。彼の国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。…」(聖典212P)〔先生註：如来が我々に対して回向してくださる。「回向」…「欲生我国」。「南無阿弥陀仏」そのものが「欲生我国」

と言う如来の呼びかけである〕と読み上げられ、いろいろお話しくださいました。

最後に曾我量深師の言葉「信に死し、願に生きよ」にも触れられ、本願は私たちのうちに法蔵菩薩となって、私たちと一緒にあって共に生き、共に死んでくださると確信していると、力強く話されました。(レポート：細川克彦〔佛足寺〕/写真：細川・神保朝成〔憶想寺〕協力)

門徒会との合同研修会 松井聰先生の法話聞書 佛足寺 細川克彦



先生は、講題「人間成就」と言う言葉は、石川県羽咋郡にあるお寺の松扉哲雄住職と言う方が、機関紙(寺報)の題名を「人間成就」とされており、文中に「私は果たして人間と言う存在であろうか」と問題提起されているのを若い時に見て、「人間でなかったら、私は何なのか」とびっくりしたと。

浄土三部経の一つ『観無量寿経』では「汝はこれ凡夫なり。心想羸劣にして未だ天眼を得ず、遠く見ることあたわず」と、人間ではなく「凡夫」とであると教えてくださっていると。

親鸞聖人は著作の中で「煩惱具足の凡夫」と言われ、道綽禅師は「一生造悪」と言われ、源信僧都は「極重悪人」と言われている。

先生は小学6年の大関松三郎少年(新潟県黒条小学校)の「虫けら」と言う詩を紹介され、人間は生きるために様々な生き物を殺さなければならぬと言う、逃れられない罪のため、「一生造悪」と話された。

大推協公開講座案内

日時 12月6日(水) 14:00
会場 難波別院同朋会館講堂
講題 南無阿弥陀仏一人と生まれたことの意味をたずねていこう
みんなに願いがかけられている
講師 澤田見先生(12組清澤寺)
参加費 無料



また、「凡夫」と言うことに「^{ひょう}異生」という意味があり、縁によって何をするかも分からないし、どうなるかもわからない身であるとも。

凡夫が人間になるためには、そう言うことに本当に気付いて、慚愧することが無ければならない。そうでないと理知分別のままに、自己中心的に生き、困った時は、周りの人や事のせいにする。



また、親鸞聖人は、「人」を定義して、①西(安楽国)に向かって行くもの。②慚愧心を持つもの③鬼神につかえないものと言っておられると。

最後に我々凡夫には、「人間成就」は「南無阿弥陀仏」を依り処にするしかない。煩惱は滅つするものではないから持ったままでよいが、迷っていたと気付くことが大事である。慚愧のところには大切なことに出会わせてことに出会わせていただいたという歓喜が伴う。

仏法聴聞とお念仏に励んでほしいと結ばれました。(毎回、法話要約を、細川克彦さんのご協力で開催出来ました。事務局、感謝です。)